

● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

どーもの休日
近藤 彰著 風媒社 2014年10月初版



はじめに

まず、私のことである。2004年右前腕に軟部腫瘍(肉腫)ができ、同年6月手術。42歳の時である。昨年6月定期検査を受け、再発、転移はなかった。軟部腫瘍の場合、10年が目安と言われているので、私も一応、サバイバー仲間入りしたことになる。ただし、右手はなく、この原稿も左手で書いている。

今思うことは、左半身麻痺を伴う脳卒中には罹りたくないこと。乙武洋匡さんのように、先天性に四肢が無くてもたくましく生きている人はいるが、右手がなく、左手も動かなくなった場合、どうやって生きるのか。痒い所も搔けないし、下の世話も出来ない。よって、罹りたくないのだ。予防のために、降圧剤を内服している。

アップル社の創業者で元CEOのスティーブ・ジョブズさんは、56歳で、すい臓がんで亡くなった。つい先日、今年の2月、十代目、坂東三津五郎さんは、59歳で亡くなった。すい臓がんである。私も今53歳。早期発見が難しく、極めて予後の悪い、「がんの王様」とも揶揄されるすい臓がんに罹る可能性はある。こちらの方は、予防法はない。ただし、覚悟しておくことはできる。今回はすい臓がんと診断された、近藤彰さんの闘病記を紹介する。

著者の紹介

1948年(昭和23年)10月24日生まれ。大学卒業後、NHKへ入局。放送記者、ディレクター、情報誌「ステラ」の編集長等歴任。2012年10月(財)NHKサービスセンター名古屋局支部長を退職。42年間のサラリーマン生活が終わり、悠々自適の生活が始まった。同年12月、末期すい臓がんが見つかった。

著者の病歴

生来健康で、がんとは無縁の家系であった。2012年5月頃から、胃のあたりに軽い不快感・痛みを感じ始めた。7月胃がんを懸念して胃カメラを飲んだが異常なし。12月に入りクリニックの紹介で、総合病院でCT検査を受ける。すい臓がんの疑いがあるため、名古屋大学医学部附属病院受診。精査加療目的のため、12月13日、同病院に入院。生検で確認され、病名は「膵頭部局所進行がん」。リンパ節転移、腹膜転移、肺転移があり、ステージ4b。余命1年と告げられる。

26日より、第1回目のジェムザール(ゲムシタビン)による抗がん剤治療が始まった。27日退院し、正月は家で過ごした。週1回外来で点滴を3週続けて受けて、4週目は休み。このサイクルを繰り返す。腫瘍マーカーCA19-9(基準値37u/ml以下)は、昨年12月が1246、今年1月が526、6月が45と大幅に低下していて、CT検査でも腫瘍の径は着実に縮小していた。ただし、6月17日、ビリルビン値が高かったため、2回目の入院。胆管へステント留置。

9月1日、肺炎に罹患して入院。吐き気、みぞおち付近の激しい痛み等自覚症状も悪くなっていた。CT検査で、これまで縮小してきた病変が再び大きくなっていることがわかった。ジェムザールに耐性がついていたのだ。食物の通過障害を認めたため、12日、胃・小腸バイパス手術施行。6月に入れたステントにも狭窄が認められたため、19日、経皮経肝胆管ドレーナージ術施行。23日、十二指腸潰瘍が原因と思われる大量の吐下血があった。輸血等施行し、その後、状態が落ちついたため、10月5日退院。但し、全身状態が悪いため、これ以上の治療は出来なかった。

10月27日、全身状態が悪化し、緊急入院。11月2日午前0時32分、家族に見守られながら旅立たれた。享年65歳であった。

本書の内容・感想

この本は、2013年1月から始まったブログ、「どーもの休日♪～しかしなんだね。ガンだって～」を書籍にしたものである。NHKの記者なので、冷静に正確に、そして、ユーモアを交えて書いてある。

その一つが、タイトル「どーもの休日」である。日々の口癖と映画のタイトル「ローマの休日」を組み合わせたものだそう。センスの良さが窺える。

最初の頃のブログは。例えば、12月30日、家族全員で自宅の近くの焼肉屋で夕食。その後、カラオケに行かれた。その夜のことである。「夜遅く自宅に戻る。いつもは各自それぞれの部屋で寝るのだが、この夜は昔の社宅暮らしの時のようにリビングに布団を敷いた。そして久しぶりに親子が川の字になって寝た。

父親が末期患者になって1ヵ月。それぞれの思いがあったことだろう。いつもの年より家族の絆を感じる年の瀬の一日であった。」日々の様子が手に取るようにわかる。

病気が進行し、死と向きあうことが余儀なくされると。10月11日のブログ。「人生のバランスシート ー何を得て何を失ったかー」。一部抄出する。

「この1年ずっと考え続けてきたことがある。すい臓がんの末期患者と運命が大きく変わる中で果たして何を得たか。そして反対に何を失ったか。失ったものは何か。まず老後の暮らしである。平均余命から判断すれば10年以上の歳月を失った。定年後の楽しみだったパリを中心としたヨーロッパのスケッチ旅行。子供の結婚を見届けることも、もしかして抱くことができたかもしれない孫の顔も見ることができなくなった。(中略)他にも失ったものは数多いが、キリがないのでこれくらいにしておく。

一方得たものは何か。毎日を大切に生きる。きわめて密度の濃い充実した1年間が送れた。そして人生に対して、運命に対して森羅万象のあらゆることに対して、より深く考えるようになった。家族の絆がより深まった。(中略)どう考えても、差し引きは大幅なマイナスである。帳尻は全くあわない。このままでは本人としては納得いかない。それが自然な人間の感情というものではないか。」

至極、同感である。

最後の11月2日のブログは、生前に亡くなった時に送信するように準備されていたものだ。タイトルは「さようなら」。一部抜粋する。

「すい臓がんの末期患者になってから始めたこのブログもいよいよ最終回である。

本音を言えば、せめて70歳までは、せめて子供が結婚するまでは生きていたかった。その意味では誠に残念・無念である。しかし運命には逆らえない。あの世にもいろいろ事情があるのだろう。そう思って少しは明るい気分で逝くことにしたい。両親や祖父母、友人、すでに逝った職場の先輩なども彼岸にはたくさんいることである。この世の報告をしてあの世のことを教えてもらおうと思う。

(中略)本当にありがとうございました。皆様のご多幸を祈念しております。さようなら。」



元NHK記者、近藤彰さんの遺影と本を手にするご家族

不条理な死を受け入れるためには、あの世に希望を見出すことも必要なのかもしれない。

本書はその他、余命1年をどのように過ごしたか、赤裸々に書いてある。参考にして、患者の立場だけでなく、医師としても今後の診療に役立てていきたい。近藤彰さん、ありがとうございました。天国で私たちを見守って下さい。合掌。

理事 井上 林太郎